

## ウクライナ戦争の歴史的位相

青島 陽子 (SRC)

### 多民族国家ロシア連邦のアイデンティティの不明確さ

2022年2月24日のロシア軍によるウクライナ領域への侵攻に始まる戦争は、ソ連崩壊に端を発した出来事で、長く引き延ばされた解体のプロセスの一環として生じたと考えられるだろう。冷戦後の世界における新生のロシア連邦の位置づけは必ずしも明確ではなかった。ロシアが、冷戦をともに終わらせたという意味で旧西側諸国と対等なパートナーなのか、単に冷戦の敗戦国なのか、明確な理解が共有されていたわけではなかった。そうした事情もあって、社会主義国家としての普遍的なイデオロギーは消失したものの、新しいロシア連邦がいかなる国家なのかは不明瞭なままだった。一方で、西方からは普遍的な価値を奉じるEUが東方へと拡大し、ロシア連邦の間近まで迫った。2014年2月にウクライナで起きた「ユーロマイダン」の発端となったのは、EU・ウクライナ連合協定への署名問題である。この協定では、ウクライナがEU構成国と「共通の歴史と共通の価値」を持つ「ヨーロッパの国であると認識」されると記され、EUはこのウクライナによる「ヨーロッパの選択を歓迎する」と述べられた。ここで「共通の価値」として列挙されたのは、「民主主義、人権と基本的自由の尊重、法の支配」などである<sup>1</sup>。他方でロシアの憲法にも、その前文には、人権と自由、市民の平和と合意、確固たる民主的基盤、世界の共同体の一員としての自覚、などの類似の文言が並ぶ<sup>2</sup>。しかし、EU・ウクライナ連合協定の署名によってウクライナが「ヨーロッパ」を「選択」しようとする時、「選択」されない側の「ロシア」の価値は、「共通の価値」のそれぞれに「非」が付くものであるかのような意味合いを帯びることにもなった。

プーチン時代になるとロシア連邦は、ロシア固有の価値を見つけ出そうと試みた。例えば「ルースキー・ミール（ロシア的世界）」とか「ネオ・ユーラシア主義」とか、様々な言い方がなされるが、その内実はそれほど明確ではない。そもそも、この土地をかつて支配したロシア帝国（王朝原理）もソ連（社会主義）も民族を超えた統治原則に基づく多民族国家であり、現在のロシア連邦でも憲法の冒頭で多民族国家であると宣言されているように、ロシア国家とロシア民族主義とは歴史的にも現在においても容易に合致しない。今回の戦争への動員の論理として、民族的な固有の価値を出そうとしているようにも見えるが、何が命を懸けて守るべき価値なのか、統一的な像が示されているとは言えない。2020年の憲法改正の際には海外同胞の支援という項目をわざわざ付け足したが、海外同胞と言ったときに誰を指しているのかも不明である。

<sup>1</sup> “EU-Ukrainian Association Agreement: ‘Guide to the Association Agreement’” ([https://eeas.europa.eu/archives/docs/images/top\\_stories/140912\\_eu-ukraine-association-agreement-quick\\_guide.pdf](https://eeas.europa.eu/archives/docs/images/top_stories/140912_eu-ukraine-association-agreement-quick_guide.pdf))

<sup>2</sup> 前文は1993年憲法から現在まで変更はない。

ロシア語話者の保護という理屈はしばしば前面に出されてきた。しかし、ウクライナにおいてロシア語話者（ウクライナ語を話さない人や、どちらも話せるがロシア語を日常生活では使う人など、この概念自体も曖昧である）はドンバス地方を遥かに超えて居住しており、領域で線を引くことは難しい。また、ロシア語話者であっても、「親ロシア」的であるとは限らず、政治・軍事の介入に対して歓迎するか、中立的な態度を示さない住民は同胞とは認識できない。

2021年7月に「ウクライナ人とロシア人の歴史的一体性」というプーチンの論文が出されたことは既によく知られる<sup>3</sup>。ここでは歴史的起源の共通性、歴史的・精神的空間の共有、国家統合、言語的近似性など、あれこれの要素が次々と挙げられ、ウクライナ人とロシア人が一体であることが主張される。確かに現在のウクライナ国民とロシア国民の先祖に当たる人々が体験した歴史には重なり合う部分が多いという言い方はできるだろうが、両国とも多元的なルーツを持つため、そこから抜け落ちるものも互いに多い。ロシアは東方に広がる多民族国家であるため、二つの民族（あるいはベラルーシも含めて「大きなロシア・ネーション」）の一体性という論理は、ロシア連邦の構成員全体を戦争に駆り立てる理屈としては強力でもない。

宗教が強調されることもある。モスクワ総主教のキリルは、NATOの東方拡大や「西側諸国」が兄弟民族であるウクライナ人を「ロシアの敵につくりかえようとした」こと、西側諸国に「ロシア嫌悪」が広まったことなどを紛争の原因だと説明するなど、プーチン政府による世俗的な説明を繰り返し、戦争を正当化しようとしている<sup>4</sup>。他方で、性の多様性などの「世界の大国が差し出す価値観」を受け入れるかどうかという「人間の魂の救済」を巡る問題がウクライナ戦争の根幹にあるとも述べている<sup>5</sup>。2022年3月18日のクリミア編入記念集会でマリア・ザハロワ報道官もまた、「ロシアとロシア国民がそのために生き、戦う覚悟のある価値観」として、英雄の記憶を忘れない国とともに、「人間の中性を認めない国」であることを挙げた<sup>6</sup>。しかし、性的マイノリティを認めないという「価値観」は宗教的保守主義にはよく見られるもので、正教に固有の価値観とも言えない。対立しているとはいえ、同宗派の信徒が多数を占めるウクライナに対して戦争へと駆り立てる強力な理屈になっているようには見えない。

プーチンは、2014年の「ユーロマイダン」直後の記者会見では、ポスト・ソヴィエト空間では政治構造が脆く経済が弱体なのだから、合法的な道筋でのみ行動すべきだ、と主張し、

<sup>3</sup> Статья Владимира Путина «Об историческом единстве русских и украинцев», 12 июля 2021(<http://kremlin.ru/events/president/news/66181>) 最終閲覧日 2022年4月9日

<sup>4</sup> 「キリル総主教、WCCの書簡に返答 「露骨なロシア嫌悪」「政治的偏見や一方的な見方」と反論」キリスト教新聞社、(<https://christianpress.jp/53361/>) 最終閲覧日 2022年4月9日

<sup>5</sup> 「ウクライナ戦争の一因はプライドパレード、ロシア正教会トップ」CNN.co.jp、2022年3月12日 (<https://www.cnn.co.jp/world/35184795.html>) 最終閲覧日 2022年4月9日

<sup>6</sup> 在日ロシア連邦大使館フェイスブック、2022年3月19日、([https://z-p3-upload.facebook.com/permalink.php?story\\_fbid=2881771495302689&id=317708145042383](https://z-p3-upload.facebook.com/permalink.php?story_fbid=2881771495302689&id=317708145042383)) 最終閲覧日 2022年4月9日

「我が国のパートナーたち、とくにアメリカ」は、「常に自分たちの地政学的・国家的利益を執拗に追求する」と非難した<sup>7</sup>。そうかと思えば、その直後のクリミア併合後の演説では、ソ連崩壊後に多様な国家に分断された「ロシア人」の悲劇を訴え、ロシア封じ込め政策を「冷戦のレトリック」として、その不合理を感情的に訴えた。現在は、上述のように、ロシアの固有の価値の保守も訴えている。大統領補佐官にして停戦交渉ロシア代表団長を務めている、前文化大臣のヴラジーミル・メジンスキーは、2022年の3月24日に「現在、ロシア文明としてのロシアの存在が危機に瀕している」と述べた。この言葉は、その前日にドミトリー・ペスコフが「国家存亡の危機には核を使うことになるだろう」と発言したことと重なって不安を駆り立てるものとなった<sup>8</sup>。しかし、メジンスキーはこの「ロシア文明」が何なのかは明確に説明していない<sup>9</sup>。

現在のロシア連邦の指導層の側には、「ロシアの存在」が脅かされ、危機に瀕しているという強い意識があるようだが、多様な民族が関係する複雑な歴史と現在の中で、言語、民族、宗教などのどれをとっても、聖戦へ動員する一貫した価値を言い当てられていない。軍事侵攻の直前の演説では、「うその帝国」としてアメリカを痛罵し、ロシアの「歴史的領土」であるウクライナが「反ロシア」になるよう仕向けられていると訴えた。そして、東部ドンバスの「ジェノサイド」やクリミアが今後軍事的に奪われることへの不安、そしてロシア自体が包囲され、脅かされていることへの被害者意識と恐怖が前面に出されている<sup>10</sup>。一方で、クリミア編入記念集会で守るべき価値としてプーチンが言及したのは、聖書の言葉である「友のために命を捧げること」であり、それがキリスト教徒だけではなく、「ロシアのすべての民族、すべての信仰を持つ人々」にとっての「普遍的な価値観」だと述べただけであった<sup>11</sup>。メジンスキー自身、「ロシア人」とは「民族的な出自に関わらず、ロシアに居住し、ロシア語を母語だと考え、本質的にロシア文化の担い手であるようなすべての人を念頭に置いている」<sup>12</sup>と述べている。ロシア連邦は「ロシア人」の国家だという強烈な意識はあるものの、「ロシア人」が誰なのか、どこまで含まれるのかは、客観的な指標で決めることはできない。結局、「ロシア人」とは国家に忠誠心があり、そのために身を捧げる覚悟がある

<sup>7</sup> «Владимир Путин ответил на вопросы журналистов о ситуации на Украине», Президент России, 4 марта 2014 (<http://kremlin.ru/events/president/news/20366/>) 最終閲覧日 2022年4月9日

<sup>8</sup> “Kremlin: Russia would only use nuclear weapons if its existence were threatened,” Reuters, March 23, 2022 (<https://www.reuters.com/world/europe/kremlin-russia-would-only-use-nuclear-weapons-if-its-existence-were-threatened-2022-03-22/>) 最終閲覧日 2022年4月9日

<sup>9</sup> «Мединский: на кону сейчас само существование России», Радио Свобода, 24 марта 2022. (<https://www.svoboda.org/a/medinskiy-na-konu-seychas-samo-suschestvovanie-rossii/31768141.html>) 最終閲覧日 2022年4月9日

<sup>10</sup> 「【演説全文】ウクライナ侵攻直前 プーチン大統領は何を語った?」NHK, 2022年3月4日 (<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220304/k10013513641000.html>) 最終閲覧日 2022年4月9日

<sup>11</sup> «Концерт по случаю годовщины воссоединения Крыма с Россией» Президент России (<http://kremlin.ru/events/president/news/68016>) 最終閲覧日 2022年4月9日

<sup>12</sup> Мединский В.Р. Мифы о русском пьянстве, лени и жестокости. Москва: Эксмо, 2018. С. 8.

者を指し、「ロシアの存在」とは彼らが忠誠を捧げる対象という、トートロジー的な関係にある。

### ロシアの西方の境界線

このように、北ユーラシアに大きく広がる多民族国家であるロシア連邦において、明確な固有の理念を出すことは難しい。過去のロシア帝国、ソ連においても、同様のことが言える。一方で、歴史的に言って、西からの圧迫に対してはロシア・ナショナリズム（あるいは何らかの「ロシア」を防御しようとする意識）が喚起されやすく、過剰な反応が引き起こされやすいという傾向はある。17世紀の初頭には、リューリク朝が断絶すると皇帝を名乗る僭称者が現れるなど、「スムータ（動乱）」の時代となった。この時、僭称者が次々現れるなか、ポーランド軍やスウェーデン軍が介入し、一時期はポーランド軍にモスクワは占拠された。ここから、「国民軍」が招集されてクレムリンを奪回し、1613年にはロマノフ朝が成立した。クレムリン横の赤の広場には、この「国民軍」を結成・指導したとされる商人のクジマ・ミーニンと貴族のドミトリー・ポジャルスキー公の銅像がある。2005年には、ソ連期の10月革命記念日（11月7日）に替えて、17世紀初頭にポーランドからロシアを解放した記念として11月4日を祝日とした（民族団結の日）。ちなみに、このポーランド軍からのロシア防衛の物語が大統領補佐官メジンスキーの歴史冒険小説『壁』（2012年）の主題となったように<sup>13</sup>、西からの脅威に対する防衛はロシア国家の存亡にまつわる重要な「神話」となっている。

この17世紀初頭の国家存亡の危機を乗り越えて以降、モスクワ国家は境界線を西へと移動させた。17世紀の半ばには、ポーランド＝リトアニア共和国内のウクライナ・コサックが反乱を起こし、モスクワ国家に保護を求めた。それを契機としてポーランドとモスクワの間で戦争が続いたが、その結果、ドニプロ川東部（左岸ウクライナ）がモスクワ国家領となった。さらに18世紀末には、ポーランド＝リトアニア共和国をプロイセン王国、ハプスブルク帝国ともに分割したことで、ドニプロ川西部（右岸ウクライナ）がロシア帝国領に加えられた。さらにナポレオン戦争で勝利すると、ワルシャワを中心とする現在のポーランドの大部分もロシア帝国領に組み込まれた（ポーランド立憲王国）。ロシア革命後にポーランドが独立すると、新興のポリシェヴィキ勢力と独立ポーランドとの間に戦争が起き、右岸ウクライナ深くまでがポーランド領となり、境界線はかなり東へと移動した。しかし、第二次世界大戦の開始時にモロトフ・リッベントロップ条約に従って、ナチ・ドイツとソ連の間で再びポーランドが分割された。この分割線が第二次世界大戦後にも維持されたことで、戦後は右岸ウクライナを超えて西ウクライナまでがソ連領内に入ることになった。ソ連崩壊に伴ってウクライナがソ連から離脱したが、新生ウクライナがロシアに対して敵対的な国家になったとすると、ロシアから見た西側の境界線は17世紀初頭まで戻ることになる。

---

<sup>13</sup> *Мединский В.Р.* Стена. Москва: Эксмо, 2018.

## ロシアとウクライナの歴史的絡み合い

現在のウクライナの領域の歴史的変遷を見てみよう。ウクライナは大半のヨーロッパ諸国と比べても大きな領域を持つ国家で、その歴史的ルーツは多様である。17世紀には、現在のウクライナ領域は、モスクワ国家、ウクライナ・コサック国家、ポーランド＝リトアニア共和国、オスマン帝国などの統治下にあった。19世紀には、ほとんどがロシア帝国領に入るが、西ウクライナはハプスブルク帝国領であった。

ロシア帝国領に組み込まれた領域においても、一元的な支配がなされていたわけではない。コサック国家の自治が破壊されエリート層の同化が進んだ左岸ウクライナや、18世紀末の露土戦争の時期に獲得し植民が進んだ南ウクライナでは、19世紀の間に漸進的な内地化が進んだ。他方で、ポーランド分割によって獲得した右岸ウクライナは西ベラルーシ・リトアニアとともに、特別行政地域のままであった。この地域は西部諸県と呼ばれ、エリート層はポーランド系であった。

ロシア帝国は超民族的な王朝国家であったが、近代的なナショナリズムの挑戦を最初に受けたのはこの西部諸県とポーランド立憲王国である。この地域では、1830-31年、1863-1864年に大規模な二度のポーランド蜂起が起きた。この蜂起は地域エリート（貴族）の忠誠心に依拠して統治を行う、王朝的な秩序を揺るがすことになった。特に二度目のポーランド蜂起以後は、西部諸県でポーランド系住民がベラルーシやウクライナの農民をポーランド語やカトリック信仰で教化することを恐れ、ロシア帝国政府は強力なロシア文化促進のプロジェクトを進めた。「ロシアの大義」と呼ばれた一連の諸政策は、ポーランド系貴族を公的生活から排除し、ベラルーシ・リトアニアやウクライナの農民をポーランド文化から引き剥がし、彼らの間にロシア文化を広めようとするものであった。言語系統が近いベラルーシやウクライナの農民は、ポーランドの「奴隷的隷属」のもとに置かれて自らの民族性を失いかけた「ロシアの民」だと考えられた。当地域は、古来「真のロシア的地域」であって「外敵の侵入に対する砦」として防衛せねばならないとも考えられた。

他方で、「小ロシア」と呼ばれた現在のウクライナ地域の独自文化は、対ポーランドの武器であると考えられ、支援されることもあった。例えば、1830-31年ポーランド蜂起の後には、近代ポーランド語文化の揺籃の地であったヴィルニユスの大学を閉鎖し（西部諸県の北部）、キーウに大学を移した（西部諸県の南部）。ポーランド語・カトリック文化が強い北部よりも、スラヴ語・正教文化が強い南部の方が高等教育の中心地として相応しいと考えたからである。聖ヴラジーミル（キーウ）大学には、左岸ウクライナからも小ロシアの地主が流入し、キーウでは独自の文化が発展した。19世紀の半ばにも、小ロシアの歴史、文化、言語を称揚する雑誌や教育の運動は当局から支持を得ていた。しかし、官僚たちは分離主義的な傾向をもつウクライナ主義の拡大を次第に恐れるようになり、1863年にウクライナ語出版物を制限し、さらに1876年にウクライナ語の使用を禁止した。しかし、ウクライナ文化を消滅させ、ウクライナ・ベラルーシ・ロシアの三民族で一体のネイションを創出するというプランが一貫して追求されたわけでもなかった。帝政末期になると出版制限は緩和され、多

数のウクライナ語での定期刊行物が現れた。帝政末期のロシア民族主義組織「ロシア民族同盟」の構成員の約半数は現在のウクライナの領域の住民で、最大の支部は右岸ウクライナにあった。この地域では、ロシア民族主義の宣伝活動を行うためにウクライナ語や地域の正教会やグレコ・カトリック教会などの遺産も積極的に活用された。また、西ウクライナはハプスブルク帝国領であり、ハプスブルク帝国政府がウクライナ民族主義に対してロシア帝国よりも寛容であったために、リヴィウはウクライナ民族主義の核としての役割を果たし、リヴィウで発展したウクライナ民族主義は、キーウにも還流した。このように、帝政期において、ウクライナ民族主義は、ロシア民族主義と複雑に絡み合いながら発展したと言えるだろう。

それに対して、ウクライナの領域をかなり広く考え、それをウクライナ人が基幹民族となる土地であると規定したのはソ連である。1922年には、ロシア、ウクライナ、ベラルーシ、ザカフカスの四つのソヴィエト社会主義共和国によって、ソヴィエト連邦が形成された。形成当初は、ウクライナ・ソヴィエト社会主義共和国では、帝政期とは逆に「ウクライナ化」政策が採られ、教育・出版・行政におけるウクライナ語の使用や党・政府機関へのウクライナ人の積極的採用などが進められた。この政策は、社会主義的理念を迅速に広めるためであると同時に、ウクライナをボリシェヴィキ政権の側に惹きつけておくための手段でもあった。内戦と外国勢力との戦争のさなか、民族主義の動員力に驚き、それに対処せざるを得なかったのである。しかし、1930年代になるとスターリン統治下で急速に中央集権化が進められ、ウクライナ化を推進した指導者は粛清され、ロシア文化とロシア民族主義が重要な役割を果たすようになった。農業集団化が推し進められる中で、ウクライナの農村では大規模な飢饉が発生し、数百万の餓死者がでた（「ホロドモール」と呼ばれる）。さらに、第二次世界大戦ではウクライナは独ソ戦の激戦地となり、ドイツの占領政策のみならず対独戦争でのソ連兵としても膨大な数の犠牲者が生まれた。独ソ戦の最中にウクライナ西部を中心に活動したウクライナ民族主義者組織（OUN）は当初、ドイツ軍に協力してウクライナの独立を試みたが、その後、ドイツ占領下においてはウクライナ蜂起軍（UPA）としてドイツ軍と戦い、ドイツ軍撤退後、第二次世界大戦が終了してもなおソ連軍とも戦った。第二次世界大戦を含むスターリン期の凄惨な歴史的記憶は、独立したのちのロシアとウクライナに深刻な亀裂を生み出すことにもなった。

### 国家的アイデンティティとしての歴史的記憶

歴史認識の齟齬という問題は、ロシアとウクライナがソ連崩壊後の国家的アイデンティティを模索する中で顕在化していった。分離した旧ソ連諸国はロシアを他者化し、恒常的な抑圧者として位置づける傾向が現れる一方、ロシア連邦もまた自らを周辺国に対する文明化・近代化の推進者とみなす意識を持ち続けた。既述のように、多民族のロシア連邦が大国としての地位を復活させるための強固な推進力や統合力を持つようとする時、その明確で強力な指標を見つけるのに苦労した。そうした中、第二次世界大戦におけるソ連の勝利は、ア

イデンティティの基盤として最大多数の人が合意できる最も重要な歴史的イベントと考えられた。(ウクライナを取り巻く『歴史の衝突』を論じたゲオルギイ・カシヤノフによれば、ロシアで誇れるものは何か、という問いに対する最も多い解答は、天然資源、軍、文化、国際的地位などを抑えて、「ロシアの歴史」であったという(2019年には53%)<sup>14</sup>。)第二次世界大戦の勝利の神話の中核には「反ファシズム」が据えられており、その世界観に基づけば、世界は「ファシスト」と「反ファシスト」の二つの陣営に分けられた。旧ソ連諸国が自らをソ連から切り離す過程で、ナチ・ドイツに対する「偉大なる勝利」の神話を見直し、共産主義とナチズムを同等だとみなすようになっていったが、そのことは、連合国の重要な一員としてのロシアのイメージを毀損するのみならず、新生のロシア連邦を統合する機能を果たす歴史的な神話を損なうことにもなった<sup>15</sup>。したがって、ウクライナが共産主義の過去を否定することは、国家的立場として「ファシスト」陣営へ移行することを意味すると捉えられ、重大な裏切り行為とみなされたのである。

ウクライナでは、特に西部において、ソ連末期からすでにソ連・ドイツと闘争した UPA 構成員はソ連体制の犠牲者としての生ける記憶であった。ウクライナがソ連の主要な歴史の語りから距離を置き、自己史を構築する過程で、OUN-UPA の記憶は次第に「ウクライナ独立の英雄的闘士」として中核に据えられるようになっていった。とはいえ独立直後には、OUN-UPA の記憶は西部の地域的なものにとどまり、ソ連の退役軍人を称揚する東部とは歴史的記憶が分断されていた。ウクライナにおける記憶の政治の変化を引き起こした一つの契機は、オレンジ革命後のヴィクトル・ユシチェンコの大統領就任である。ユシチェンコは他の分野で思うような成果が上がらなかったために、記憶政策の分野に力を入れた。2006年にはウクライナ国家記憶研究所を創設し、これを内閣府の直轄の機関とするとともに、ウクライナ安全保障部門に歴史文書の管理を命じるなど、新しいウクライナ史の研究調査や普及に力を入れた。ユシチェンコは、共産主義体制に関連した記念碑を解体し名称を変更しようとする一方、ホロドモールをウクライナ人民に対するジェノサイドだとする対外的な承認を国連やヨーロッパ議会などの国際的な機関から得ようと多大な努力をした。さらに、OUN-UPA の記憶を地域的な歴史の語りから国家的な歴史の語りへ昇格しようとも試みた。

---

<sup>14</sup> 2014～2016年に行われたレヴァダ・センターの調査に基づいている。Georgiy Kasianov, *Memory Crash: The Politics of History in and around Ukraine, 1980s–2010s* (Budapest: CEU Press, 2022), pp. 78–79.

<sup>15</sup> メジンスキーはこの問題について次のように述べている。「私たちは今、どこにいますでしょう。2009年、第二次世界大戦がはじまってから70年になります。突然、EUでは、どこからともなく、この悲劇的な出来事におけるソ連の役割について正真正銘のヒステリーが起こったのです。何か不自然な論理でスターリンとヒトラーを世界的な大量殺戮開始の罪人として同等に扱い始めたのです。ソ連は第三帝国と同列になりました。こうしたことは至る所に現れました。インターネットの喚き声から、欧州評議会や多くのヨーロッパの議会の公式の声明まで。その過程で戦争に関する一揃えの悪意に満ちた神話が引き出されたのです。私はこの議論に参加せずにはいられませんでした。」*Мединский В.Р. Война. Мифы СССР. 1939–1945.* Москва: Эксмо. 2018. この本は、のちに述べるメジンスキーの「神話」反駁プロジェクトの一環である。

しかし、この時期はまだウクライナの歴史的記憶は分断されており、特に OUN-UPA の記憶に関しては東部や南部からの反応は冷ややかであった。さらに、OUN-UPA はポーランド人やユダヤ人の虐殺とも関連していたため、彼らを英雄視することには、ポーランドやユダヤ人団体からも非難の声が上がった。ユシチェンコの政敵（左派や親ロシア派ら）は、UPA の戦闘員に対して「ファシスト」「ナチ協力者」とレッテルを貼り、拒絶した。ロシア政府もオレンジ革命に極めて否定的な態度をとり、ウクライナの指導者を「ナショナリスト」「ファシスト」と非難した。この時期、ロシアでも同様に（2009 年）、歴史の問題が国の基盤への脅威であるとみなされ始め、「歴史の改竄」と闘うためのロシア連邦大統領委員会が設置された。大統領府がロシア科学アカデミーのなかの「共犯者」を炙り出そうとする試みは、公衆の怒りを喚起し、プーチン期の 2012 年にこの委員会は活動を停止した。しかし、委員会の活動の結果、歴史の「改竄」は国の「国家安全保障への脅威」であるとする認識が残ることになった。ウクライナ、ロシアの双方において、ソ連史の認識は、単なる国家アイデンティティの問題を超えて、国家安全保障の問題として捉えられ始めたのである。

ヴィクトル・ヤヌコーヴィッチが大統領になると、大祖国戦争のナラティブが戻ることになった。2010 年 5 月には、ウクライナ・ロシア・ベラルーシによる第二次世界大戦の合同の祝賀が催され、初めてキーウでロシアの軍隊が参加した軍事パレードが行われた（以前はセヴァストポリのみであった）。ウクライナ国家記憶研究所は国の機関から単なる研究機関へ格下げになった。さらにヤヌコーヴィッチは、2010 年 4 月 27 日に欧州評議会で、ホロドモールをジェノサイドと認識するのは「間違っているし不正である」と述べた。この時期、ウクライナを中心とする記憶の衝突は比較的緩和された。ポーランドとロシアの間の対話も一時回復し、2010 年にメドベージェフ大統領はヤヌコーヴィッチとともにホロドモール記念館にも足を運んだ。

一方でロシアはこの時期、プーチン政権の下で文化・民族的な失地回復主義 *irredentism* が高まり、記憶を核とする国家アイデンティティの強化が進められた。プーチンは当初から歴史問題に関心が強かったと言われるが、2013 年には歴史教科書における「単一の枠組み」が模索されるようになった。特にそこで重視されたのは、ソ連とナチ・ドイツを全体主義体制として同一視する見解に対抗することだったと言われる。同時に、「ロシア」の名誉回復の作業も進められた。大統領補佐官メジンスキーは数多くの出版物を出しているが、その中にロシアの「神話」シリーズがある。このシリーズは「外国人観察者」から聞かされてきた「ステレオタイプ」（例えば、酔っ払い、怠惰、残忍さ、不潔、強奪、忍耐、民主主義、「民族の牢獄」など）に対して反駁するものであり、「邪悪な政治的神話を見抜き、解毒することを学ばば、自国と自国史への誇りがロシア人の中で遥かに高まるだろう」とその趣旨を説明している<sup>16</sup>。例えば、「太古の昔からのロシアの権威主義、民主主義や自治の能力欠如という神話」が拮がっているが、初期にはロシア皇帝は選挙で選ばれていたし、当時のイギリス議会よりも民主的な構成をもつ「ゼムスキー・サポール」があったのだ、という。自分た

<sup>16</sup> *Мединский. Мифы о русском пьянстве, лени и жестокости. С. 9.*



ち自身がそのことを信じなくなっているが、「住民の大多数が民主主義の気配もない国に生まれて、その国の歴史ときたら、無意味な帝國的野望、隣人への脅迫、諸民族への暴力、アルコール中毒、醜悪さ、怠惰、愚鈍ばかりなのだと信じている限り、自国に誇りは持てない」というのである<sup>17</sup>。

「ユーロマイダン」が起こる直前の2014年1月22日に、メディアがメジンスキーに対して、「ソ連の復権」を試みると旧ソ連構成国との「統合プロセス」に障害になるのはいか、またロシア社会の分裂も促進するのではないかと質問したが、それに対してメジンスキーは次のように答えている。ソ連の復権は先祖を嘲笑したくないという健全なロシア市民の願いを表しているものだ。国の発展の障害は、自らのアイデンティティを替え、ロシアには「普通」のものなど何もなかったし、今後もないであろうと考え、そんな国から逃げたいと願う人によってつくられている、という。他方で、ポスト・ソヴィエト空間については、すでに個々の新生国家はモスクワから独立した政権を正当化するという政治的 목적を達成したので、ロシアとは異なる固有のアイデンティティ（つまり歴史）を構築しようとする活動のピークは過ぎている。現在は、個々の国のエリートはロシアとの統合的關係を拡大することが重要だとの結論に必然的に達して、共通の歴史的過去を模索するようになっている。したがって、今は、あまり政治的ではない「歴史的な神話づくり」の時期が来ているというのである<sup>18</sup>。

### ユーロマイダンとクリミア併合後の「記憶の衝突」の激化

メジンスキーが旧ソ連諸国との一定の友好的關係を構築しつつあると述べた直後の2014年2月末、「ユーロマイダン」が起こった。それに伴い、歴史の政治もまた戻ることになった。ウクライナでは、OUN-UPAの英雄的なナラティブが国家的なレベルで制度化されることになった。OUN-UPAが持つネガティブな意味は消え、ウクライナへの献身や戦う意志の象徴としての機能を果たすようになった。ホロドモールは再びジェノサイドと認識されるようになり、国際的な認知の獲得のための活動が行われた。2016年6月には、キーウにあるモスクワ通りの名称はバンデラ通りに変更された。ウクライナ国家記憶研究所は2014年に再び国家機関となり、2015年4月には、「脱共産主義化」プログラムが開始された。ウクライナ議会で採決された四つの記憶法のなかには、「共産主義者とナチの全体主義体制」を双方とも批判し、それらの象徴をプロパガンダすることを禁止する法や、20世紀にウクラ

---

<sup>17</sup> *Мединский В.Р.* Мифы о русской демократии, грязи и «тюрьме народов». Москва: Эксмо. 2019. С. 6–8.

<sup>18</sup> *Мединский В.Р.* Культурная политика и национальная идея. Москва: Книжный мир, 2017. ちなみにこうしたロシアの動きは、ロシア連邦を中核とする緊密な国家關係を周辺国と構築しようとするものであって、必ずしもロシア帝国やソ連を復興させようとする明確な試みとは言えない。ロシア国家「千年の歴史」の記憶を継承しつつ（2020年修正憲法）、新たな發展を目指すということであろう。実際、ロシア連邦の（模索中の）国家イデオロギーや現行体制はロシア帝国やソ連とは異なるし、国家領域の感覺も可變的であるように思われる。

イナ独立のために戦った闘士を称揚する法が含まれた。さらに、共産主義のプロパガンダを拡散した場合は懲役 10 年の罰を受ける可能性があるとして、国内や諸外国からも批判を浴びた。しかしながら、ロシアによるクリミア併合やロシアが後援する東部ドンバスの分離派との軍事衝突の中、「脱共産主義」によって過去を「取り戻す *reclamation*」ことは、ウクライナにおいて国家安全保障の問題だと捉えられた。

ユーロマイダンを境に、ロシアの記憶政策も激化した。2014 年には、ロシア議会では、「第二次世界大戦期のソ連の活動に関して故意に誤った情報を宣伝」することに対して刑事責任を問う法律が採用された。2015 年には大勝利に関わるプロパガンダ・キャンペーンが始められ、スターリンに対する否定的評価は弱まっていった。2020 年の憲法改正では、「歴史的眞実の保護」と「祖国防衛における国民の偉業」の重要性が毀損されることがあってはならないと謳われた。2020 年 9 月には、「歴史的事実の歪曲を防ぐ」ための部署が創設された。こうした過程で OUN と UPA は悪魔化され、ウクライナ・ナショナリズムは「ファシズム」と同等と見られるようになった。

ユーロマイダンとクリミア併合直後の 2014 年 3 月 27 日には、メジンスキーの態度もまた硬化している。ウクライナ正教会府主教ソフロニーがヴァレンチナ・マトヴィエンコとメジンスキーを「ウクライナ民族の裏切り者」と呼び、「ウクライナ民族の苦しみが分からないのか」と非難すると、メジンスキーは逆に「バンデラというクズ」やソ連解体によるウクライナ人の苦しみを忘れたのかと反論した。(メジンスキーは現在のウクライナのチェルカスイ出身であるが、自らの出自について次のように述べている。「私は自分の出自がウクライナ人であることを忘れていない。実際、ポーランド人だのドイツ人だの、様々な血が混ざっていて、民族的には特に純粋であるわけでもない。これは多民族ロシアにとってよくある混血で、私は自分を眞のロシア人だと考えている。')そして、自分は「ロシアとウクライナが一つの肉体を持ち、一つの偉大な民族であった」ことを記憶していると続ける。最後に「ウクライナがロシアから離れたときは、いつでも、いつでも(!)、リトアニア、ポーランド、ドイツなどの簡単に手に入る獲物になってきた。今日、ウクライナは誰の獲物になるのか。ハード路線ではラジカルなネオナチ主義者か、あるいはソフト路線ではプロテスタント西欧による委任統治の半植民地か」と問うた。そして、「今日、ウクライナの未来を考えるとすることは、その自由と主権のためにロシアとともに戦うこと」であり、「ウクライナを愛するということは、権力の座に就こうとするネオナチからウクライナを守ること」だと主張した<sup>19</sup>。

メジンスキーによれば、「どんな主権国家」も自国に有利になるように「歴史を利用する」べきであり、国のエリートが歴史的記憶に一貫した影響を及ぼすことを拒否するならば、それは「自らの主権の一部を拒絶」することになるのだという。とはいえ、すべての歴史的解釈が「平等」だというのは「ポストモダンの戯言」だと続ける。つまり、「歴史の政治化」や

<sup>19</sup> *Мединский. Культурная политика и национальная идея. С. 16–17.*

「現在の政治の利益のために歴史を利用すること」を否定し、歴史を科学として位置づけるべきだというのである<sup>20</sup>。しかし、メジンスキーがこのように言う時、専門研究者の検証を経ることで歴史の実体に近づくことを重視しているというよりは、自らの歴史の語りを科学の御旗の下に置き、敵対する歴史の語りを「神話」として排除しようとしているように思える。

このように、現在のウクライナ戦争の中でさかんに用いられる「非ナチ化」は、ソ連崩壊後の国家アイデンティティ形成と「記憶の衝突」のプロセスを経て形成された概念である。ソ連の崩壊によって境界線のあり方が劇的に変化した北ユーラシアにおいて、ロシア連邦は自己のナショナル・テリトリーがどこまでなのかははっきり認識できず、国家を統合する核となる要素も明確にはできていなかった。国家への忠誠心の調達を重視するものの、何が国家への忠誠心を保障するのかは分からなかった。その中で、もっとも広範に国家への献身の心情を調達しようと考えたのが大祖国戦争勝利の神話であり、この神話を受け入れるのかどうかは忠誠心の指標としての機能を果たすことになった。そして、大祖国戦争の神話に賛同しない者は「ネオナチ」であり、ロシアに敵対的な人々だとカテゴライズされることになったのである。このように、「ナチ」「ファシスト」と言った用語は、自立傾向を強めるウクライナの国家アイデンティティを敵対する側から非難する言葉であって、必ずしも具体的にナチに近い思想を持った人々がいるということを示すわけではない。したがって、「非ナチ化」には実体もないが、イデオロギーとしての体系性もない。実際、具体的な歴史的経緯や個々の歴史認識が戦争の正当化のために系統的に使われているわけでもない。単にこれらの言葉は、西方からの圧迫による国家存亡の危機感と裏切り行為を働いた（とロシア側が考える）ウクライナに対する怒りを表現し、多くのロシア市民にその共有を促して、戦いに引き込もうとする修辞に過ぎない。

### 勝利の神話を超えて

国家の名誉回復の試みや隣国との記憶の衝突はロシアとウクライナの間だけ起こっていることではない。いかに両国の歴史認識の対立が先鋭化したとしても、突如としてロシアが軍事侵攻したことを正当化しないのみならず、その行動を説明もしない。なぜこのタイミングでロシア軍が突然、ウクライナ領域に全面侵攻したのかということの説明するためには、軍事的なロジックを追わねばならないのだろう。今回、主権国家に対する公然たる軍事攻撃に世界は衝撃を受けたが、実際には冷戦終結後も主権国家に対する軍事攻撃はユーゴスラヴィア、アフガニスタン、イラク、リビア、シリアなどで続いてきた。ロシアはそれらに様々な形で関与し、間近で体験して影響を受けてきた。ロシアは自らもチェチェンで分離派懲罰の大規模な戦争を繰り広げ、ジョージアに対して首都まで軍事侵攻をし、シリアにも本格的な軍事介入をした。「ユーロマイダン」後も、クリミア併合時には軍隊を投入しており、東部ドンバスでは実質的な戦闘をしてきた。冷戦後の世界において国際・国内問題の解決手段

---

<sup>20</sup> *Мединский. Культурная политика и национальная идея. С. 3–8.*

として軍事力を行使する代表的な国はアメリカとロシアであろうが、アメリカでは指導層が定期的に交代するのに対して、ロシアでは21世紀になってから現在までプーチンが実質的に支配している。プーチン政府とロシア軍は、間断なく軍事的なロジックに晒され、実際の軍事的行為に関与し続けており、国際・国内政治の手段、ゲームチェンジャーとして軍を実戦投入することに対する抵抗感は、我々が想像する以上に低いのだろう。大祖国戦争の勝利の神話に依拠した世界観のなかで、裏切り者を徹底的に叩かないと自分の身が危険に晒されてしまうとか、その危険の除去は実質的な戦いを重ねてきた自国軍によって鮮やかに成し遂げられるはずだという、戦いへの献身と来るべき未来の勝利への陶醉（と強迫観念）のようなものが増幅しているようにも見える。ロシア国民の大半もまた、こうした指導部の空気に巻き込まれているだろう。

ロシアはウクライナを不条理の暴力の世界に引き入れた。「ユーロマイダン」とクリミア併合後の東部ドンバスでの戦闘は8年継続していた。現在、戦争は双方の存亡を賭けた戦いとなり、「西側」諸国がウクライナへの軍事支援を強化すればするほど、ウクライナの人的・経済的被害はますます凄惨で甚大なものになるというジレンマにも直面している。軍事の論理が世界に広がれば、制裁による経済的対立構造は軍事的対立構造へと発展し、世界経済や国際秩序を破壊していくことにもなりかねない。可能な限り早くロシア軍をウクライナ領域から全面的に撤退させる必要があるだろうが、そのためにはロシアが勝利の神話を手放さねばならない。それを成し遂げるために、ロシアの内外から暴力的に現政権を打倒する以外の方法を模索するのだとしたら、幅広く受け入れられる普遍的真理から照らし出した時のロシアの行動の誤りをロシアのエリート層や広く国民に対して訴え続けるしかないだろう。そのためには、国際法学の分野で専門的に積み重ねられてきた議論に基づき繊細な説得を多面的に続けることも必要であろう。その中から、より多くの国々を包摂しようような「戦後」の新しい国際秩序が見えてこなくてはならない。

さらに長期的に見れば、何世代にも渡るような非妥協的で対立的な歴史的記憶がこの地域に蓄積することになるだろう。ティモシー・スナイダーが論じたように、ヨーロッパとロシアの境界領域では、二度の大戦を経て、近代的な民族的ネイションが生まれ（この地域において個々のネイションのイメージにおける領域は重なり合っている）、民族浄化や民族移動によって境界内の住民が画一化し、そして最終的に相互に和解するというプロセスが生じた。ロシアとウクライナも、このプロセスを辿るのだろうか。このプロセスを経るということは長期にわたる甚大な人的・物的破壊を経験することを意味するし、仮にそれを経たとしても、「ヨーロッパ」とその外部との境界線が走るようになるような二国間で和解は可能なのだろうか。ロシア連邦が多民族国家であることを考えると、ウクライナとロシアの間に鉄のカーテンを引き直すだけで地域が安定化するかどうか分からない。むしろ、民族的ネイションの分離の作業が痛みを伴う形でさらに東に移動することはないのだろうか。メジンスキーは、歴史的記憶への影響力の行使は主権の一部であると述べた。それに対して、歴史を専門に研究する立場としては、歴史的真相は科学的に論証されねばならないと反論せざる

を得ない（メジンスキー自身、建前上、そのことを否定していない）。長期的に見て重要なのは、両国の歴史観の政治的和解を目指すということ以上に、政治から歴史の諸問題を離し、多言語・他地域の歴史研究者が専門的な見地から歴史の実証研究に関与していくことであろう。

メジンスキーはロシアのステレオタイプに対して反駁する中で次のように述べている。「世界へのロシアの脅威、絶え間ないロシアの侵略」という「神話」は、自分たちの国民意識に悪影響を及ぼすのみならず、「世界の支配的エリートの行動の指針となっている」という点で、一層危険である。「ロシアが来る！」は単なる神話ではない。17世紀から今日に至るまで、地政学的なライバル関係にある諸国家の反ロシア的外交政策のイデオロギー的ライトモチーフなのだ」と<sup>21</sup>。メジンスキーが試みようとした、ロシアのイメージの改善による自国への自信の回復と他国の敵対的政策の緩和は成し遂げられなかったばかりか、「ロシアが来る！」の「神話」を自ら実証する結果になったのは絶望的な皮肉である。

本稿は2022年3月25日（金）16-18時開催のオンラインシンポジウム「ウクライナ戦争の背景とその波紋：我々は今どこにいるのか」における報告をもとにしている。

2022年4月11日札幌

#### 主要参考文献

- Fedor, Julie, Markku Kangaspuro, Jussi Lassila, and Tatiana Zhurzhenko, eds., *War and Memory in Russia, Ukraine and Belarus* (London: Palgrave Macmillan, 2017).
- Hillis, Faith, *Children of Rus': Right-Bank Ukraine and the Invention of a Russian Nation* (Ithaca: Cornell University Press, 2013).
- Kasianov, Georgiy, *Memory Crash: The Politics of History in and around Ukraine, 1980s–2010s* (Budapest: CEU Press, 2022).
- Miller, Alexei, *The Ukrainian Question: The Russian Empire and Nationalism in the Nineteenth Century* (Budapest: CEU Press, 2004).
- Snyder, Timothy, *The Reconstruction of Nations: Poland, Ukraine, Lithuania, Belarus, 1569–1999* (New Haven: Yale University Press, 2003).
- Staliūnas, Darius and Yoko Aoshima, eds., *The Tsar, the Empire, and the Nation: Dilemmas of Nationalization in Russia's Western Borderlands, 1905–1915* (Budapest: CEU Press, 2021).
- Weeks, Theodore R., *Nation and State in Late Imperial Russia: Nationalism and Russification on the Western Frontier, 1863–1914* (DeKalb: Northern Illinois University Press, 2008).
- Долбилов М. и А. Миллер. Западные окраины Российской империи. М.: Новое Литературное Обозрение. 2006.

---

<sup>21</sup> Мединский. Мифы о русской демократии, грязи и «тюрьме народов». С. 6.

*Федевич Климентий*. Кейс украинского “русского национализма” в Российской империи, 1905–1914 гг. // *Ab Imperio*. №3. 2020. С. 69–97.

伊東孝之・井内敏夫・中井和夫編『ポーランド・ウクライナ・バルト史』山川出版社、1998年

小泉悠『「帝国」ロシアの地政学—「勢力圏」で読むユーラシア戦略』東京堂出版、2019年  
シュテルマー、ミヒャエル（池田嘉郎訳）『プーチンと甦るロシア』白水社、2009年

トレーニン、ドミトリー（河東哲夫、湯浅剛、小泉悠訳）『ロシア新戦略—ユーラシアの大変動を読み解く』作品社、2012年

中井和夫『ソヴィエト民族政策史』御茶の水書房、1988年

橋本伸也編著『せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問題—ナチズムと社会主義の過去を巡る葛藤』ミネルヴァ書房、2017年

マーチン、テリー（半谷史郎監修、荒井幸康、渋谷謙次郎、地田徹朗、吉村貴之訳）『アフターマティヴ・アクションの帝国—ソ連の民族ナショナリズム、1923～1939年』明石書店、2011年

和田春樹編『ロシア史』山川出版社、2002年

JSPS 科研費：基盤研究 B 「融解する帝国—ロシア帝国末期の境界地域における統治の近代化と社会の流動化研究課題」（21H00581）

\* 本稿はすべて個人の見解であり、所属大学、組織などの立場を反映したものではない。